

序論：二つの世界のあいだで

ドロン・B・コヘン

便宜上「中世」と称される長い世紀のあいだ、ユダヤ人はヨーロッパ、西アジア、北アフリカのキリスト教徒とムスリムの世界のあらゆる場所に拡散した個別共同体に主に住んでいた。それらすべての場所で多数派の宗教の人々との関係は、時には困難で苦痛なものであったが、時には実り多く互恵的なものでもあった。その時代の学者や著述家によって残された偉大な遺産は、今日の我々にとって興味と魅力の絶えることのない源である。今年度の会議で発表された講演、研究論文、コメントは、歴史的出来事に対する我々の見方や古いテキスト解釈について革新的ないくつかの見解を提示し、それらの時代を想起させる複数の道をたどっている。

本報告書の前半部に反映されている会議の前半部分では、十字軍と後のヨーロッパのユダヤ人迫害という悲痛な背景に抗った、ユダヤの創造性に対するキリスト教の影響の問題を取り上げた。「迫害への応答としての中世ユダヤ文化」と題した公開講演会で、マルク・サパーステイン教授は、方やこの迫害はまた「ユダヤ文献に不可欠な一部分となったテキストを生み出し、創造的な文化的応答へと導いた」と主張している。彼は迫害の体験を記録した『年代記』と、迫害に触発されてユダヤ社会の内的批判を表した『倫理的勧告と非難』のテキストの、二分野の文献の紹介へと話を進めている。サパーステイン教授は、迫害の四時期——ドイツ（第一回十字軍）、スペイン（14世紀末の反ユダヤ暴動と1492年のユダヤ人排斥）、ポーランド（1648年のコサック大虐殺）——を追跡した著作から引用かつ紹介している。この資料研究が、ユダヤ人に降りかかった悲惨な出来事に対する彼らの宗教的応答を理解するだけでなく、それら異なる時期の彼らの生活のより正確な光景を描くためにも、我々にとっていかに役立つかが示されている。「キリスト教モデルに影響された中世ユダヤ文化の創造性」と題されたワークショップの論文の中でサパーステイン教授は、ユダヤ人の宗教性と著作は、自己犠牲と贖罪に関連づけられた発想といったキリスト教の様々な考え方を吸収して、多数派のキリスト教徒の中での生活を通じて影響を受けたことを実証し続けようとしている。彼は、迫害と敵対意識にも関わらず、ユダヤ人は「キリスト教文化という、外部の肯定的影響に対して開かれていたことで、ユダヤ教の中にキリスト教文化の側面を組み込み得た」と結論づけている。サパーステイン教授に対する応答として、ドロン・B・コヘン博士は、先の論文で挙げられた次の三点、すなわち、第一回十字軍に対する応答から生じた神義論

の問題、「ドイツの敬虔な」ユダヤ人とキリスト教環境の間にある関係性、『光輝の書』と他のユダヤ著作における「苦難のメシア」の描写について、より詳細な検討を提示している。

会議二日目はさらに時間をかけて、中世ユダヤ教の偉大な賢者であるモーセス・マイモニデス（1135-1204）に注目し、イスラーム哲学と科学との彼の親密な知的関係に焦点をあてた。彼の作品はユダヤ思想と法だけでなく、イスラーム哲学者と科学者、またキリスト教神学者に対してもかなりの影響を残した。マイモニデスは、ユダヤ法、哲学、医学の、少なくとも三つの分野の作品を通して影響を与えた。彼の主要著作には、アラビア語で書かれた『ミシュナー註解』と『戒律の書』、ヘブライ語で書かれた14巻のユダヤ法典『ミシュネー・トーラー』（第二のトーラー）、そしてアラビア語で書かれた彼の偉大な哲学的著作『迷える者の手引き』（*Dalālat al-Hā'irīn*）が含まれている。発表者は各々の論文を上記のすべて、またマイモニデスの数ある医学的論文のいくつかに関連づけた。

二日目の議論は、本報告書では二部に分けられている。第一部は、ワレン・ゼエブ・ハーヴィー教授による二本の寄稿論文、最初の「マイモニデスの一神教：聖書とアリストテレスの間で」と題した公開講演を含めたものである。ハーヴィーは、マイモニデスの一神教理論を年代順に賢者の著作を通してたどり、神の非物体性の主張においてマイモニデスはアリストテレスに追随したが、神の非物体性についての彼の主張は、聖書とユダヤ思想により多くを負っていると論じている。マイモニデスの著作はある意味秘儀的であったため、特定の神学的かつ哲学的問題について彼の正確な意見を突き止めるのは難しいとされている。しかし、ハーヴィーは「彼は究極的には無比であることとしての唯一性を、非物体性としての唯一性よりも好んでいる」と確信しており、これをマイモニデスの様々な聖書箇所に関する議論を通して示している。「マイモニデスにおける『当惑』（*hayra = aporia*）の意味」と題されたワークショップの論文で、ハーヴィーは『迷える者の手引き』に焦点をあて、マイモニデスが『手引き』を書いた相手にとって、誰が「困惑している者」であるかを理解しようと試みている。ハーヴィーは、5つの異なる例を引用し、マイモニデスは「当惑」（*hayra*）を様々な文脈で使用しており、『手引き』の著者自身が彼自身の困惑から決して自由ではなかったことを示している。この論文の後に高木久夫教授のコメントが続き、長年当然のことと捉えられてきた事柄についてのハーヴィーの新鮮な見解は、当惑の意味が哲学と宗教法（あるいは理性と聖典）の対立という学問的見解に制限されてきたことを示したものであるとの認識を示した。高木はこの新しい見解についていくつかの派生的問題を示そうとしている。ハーヴィー教授は彼の元の原稿に二つの補遺を加えたが、一方は高木教授のコメントに対する彼の

応答であり、他方は発表に続いた議論における、特に四戸潤弥教授のクルアーンの節に基づいた『手引き』の題目の付加的意味に関するものである。

本報告書の最後の部分である第三部では、会議二日目に発表された四本の論文を載せている。ダニエル・デイビス博士は「哲学者と神学者のあいだ：アヴィセンナの世界の無限性に対するマイモニデスの応答」と題した論文を発表し、時間の本質と世界の創造に関するアヴィセンナの見解に対する、マイモニデスの間接的応答について取り組んでいる。アヴィセンナは、マイモニデスが多くの点で概ね賛同している哲学者の象徴であるが、法の基盤としての、彼にとっては必然である創造の問題に関しては対立していた。一方、デイビスは、神学者の心象を受け入れるよりも理性を支持し、かくしてこの問題を読者自身が熟考するように挑んだマイモニデスの奮闘について論証している。神田愛子氏は「マイモニデスの宇宙観－ギリシアとイスラーム思想との比較において」と題した論文で、当時の他のユダヤとイスラームの思想家の見解と、彼らを導いた古代ギリシアとローマの見解といった背景に抗した、マイモニデスの占星術、天文学、そして宇宙観に関する見解に目を向けている。彼女は『迷える者の手引き』から引用し、アリストテレスに追随しつつも、彼の見解はユダヤの賢者たちの見解と一致しているが、新プラトン主義的見方も同様にマイモニデスの宇宙の像に組み込まれていることを示している。そして、その像の形成を導いた原典を本格的に特定するためには更なる研究が必要であると論じている。法貴遊氏は、別の科学的かつ哲学的問題を「マイモニデスの医学文献と『迷える者の手引き』における種の形相と特性について」という論文で扱っている。中世の科学において「特性」は医学関連の用語であったが、他方では哲学的意味をも包含した。法貴は、一方ではアンダルスの実践医学の知識を、他方ではアヴィセンナの哲学を含めつつ、当時の医学と哲学の動向を関連付けてマイモニデスの立場を研究するために、本概念を議論の中で用いている。最後に「12世紀以降アンダルスのユダヤ－イスラーム文化の東漸：イスラーム思想史の新たなビジョンを求めて」と題した短い導入的概観の中で、仁子寿晴博士は、主にイベリア半島の西方イスラーム王朝からの知識の流れを、ユダヤ学者も加わった東方ムスリムの中心地へとたどっている。仁子はまず、マイモニデスとアヴェロエスを含めた、西方からの学者に関する情報を組み込んだ東方で書かれた著作を紹介している。彼は次に、東方の天文学者の著作において、西方からの天文学的知識を取り入れたいくつかの具体例を挙げている。本研究は、中世の様々な民族と宗教の研究者が持つ知識の移転と共有という、より広い観点へ向けた第一段階である。